

精神的問題を抱える生徒への関わりの実際

— 中学校・高等学校養護教諭へのインタビュー調査 —

今野 浩之¹⁾・佐藤 大輔²⁾・高谷 新²⁾
田名部 由香²⁾・青木 実枝³⁾

Addressing students with mental problems: results from the interview with junior high and high school nursing teachers

Hiroyuki Konno¹⁾, Daisuke Sato²⁾, Sin Takaya²⁾, Yuka Tanabu²⁾, Mie Aoki³⁾

Abstract

The study aims to clarify current conditions and issues in a daily relationship between nursing teacher and student with mental problem by focusing on junior high/high school students as susceptible age for mental illness.

The study conducted a semi-structured interview survey for 4 nursing teachers at junior high/high schools in Prefecture A, prepared a word-for-word record for the interview, then inductively classified similar meanings/contents into categories.

The study extracted 6 categories as “Characteristics of today’s elusive students and human relationship”, “Necessity of cooperation with community and utilization of social resources”, “Comprehension of family environment and a relationship with parents”, “Expectation towards related organizations and disagreement in understanding”, “Belief and conflict as a teacher”, and “Preparation for a cooperative structure among school staff”. Although nursing teachers recognized a necessity to make an adjustment with external related organizations, they also felt a difference in direction of support with the actual adjustment.

It was clarified that nursing teachers provided supports to students through trial and error in a cooperative structure with class teachers and other school staff while holding a conflicted feeling in the circumstance of today’s elusive students due to social background or student’s family environment.

Key words : nursing teacher, junior high school, high school, mental problem, support

1) 山形県立保健医療大学 保健医療学部看護学科
〒990-2212 山形県山形市上柳 260
Department of Nursing,
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260, Kamiyanagi, Yamagata-Shi, Yamagata, 990-2212, Japan

2) 社会医療法人二本松会 山形さくら町病院
〒990-0045 山形県山形市桜町 2-75
Yamagata Sakuracho Hospital
2-75 Sakuracho, Yamagata-Shi, Yamagata, 990-0045, Japan

3) 前山形県立保健医療大学 保健医療学部看護学科
〒990-2212 山形県山形市上柳 260
Former Department of Nursing,
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260, Kamiyanagi, Yamagata-Shi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2017. 12. 25, 受理日 2018. 2. 27)

はじめに

精神科の臨床場面において、精神的に問題を抱える児童や生徒に対し、どのように関係性を築いていけるのか判断できず、戸惑いを訴える教諭に遭遇することがある。先行研究においても、学校と医療の連携の重要性が示唆されているが¹⁾、事例の個別性の複雑化、プライバシー等の問題から、解決の糸口を見出せないまま、重症化した後のケースに介入することが多々ある。

これまで筆者らは、精神科医療における専門性の観点から精神的問題を抱える児童および生徒とその親、学校教諭を対象とした支援方法の検討を行ってきた。教諭から児の気になる様子を指摘された親の思いに関する考察²⁾では、学校側から受診を勧められ、戸惑いながらも精神科受診へ同行する保護者の実態、学校教諭の戸惑いが明らかとなった。また、A 県内における小学校・中学校・高等学校へのアンケート調査³⁾において、教諭の多くが精神的問題を抱える児童や生徒との関わりの経験があったこと、養護教諭は児童や生徒の精神的問題の対応として学校外の関係者との接点が多いこと等が明らかとなった。一方、実際の教育の現場において、生徒との関わりの中で生じている教諭の具体的状況の把握について不十分であったことは否めない。本研究では、精神的問題を抱える生徒への支援において、医療機関や他機関との調整役としてのキーパーソンとなり得る養護教諭を対象とし、その実情についてインタビュー調査を実施したので、結果を報告する。

目 的

精神疾患の好発年齢である中学校および高等学校の生徒に着目し、養護教諭が精神的問題を抱える生徒との日々の関わりの中で捉えている現状と課題を明らかにする。

用語の操作的定義

「精神的問題」:

「身体的障害は存在しないにも関わらず、日常生活においてコミュニケーションや行動に障害をきたすこと」または「身体的障害は存在しないにも

かわらず、日常生活においてコミュニケーションや行動が、同年代の生徒より低下している状態」

研究方法

1. 研究デザイン: 質的記述的研究

2. 研究参加者: A 県内の中学校・高等学校養護教諭 計 4 名

3. 調査時期: 平成 27 年 8~9 月

4. 研究参加者への依頼方法

研究目的および方法を記載した文書を A 県内の全中学校および公立の全高等学校の管理者宛に郵送し、精神的問題がある生徒と関わった経験がある養護教諭の紹介を依頼した。本研究における研究協力が得られた場合のみ、「研究協力者紹介書」にて研究者宛に返送頂いた。研究協力者紹介書のリストを参照し、経験豊かな幅広い知見が得られるよう、対象者の年代から一定の経験年数があると予想される中堅以上の養護教諭を選定し、改めて、研究参加者本人へ依頼した。本研究における趣旨を口頭と書面にて説明し、同意が得られた高等学校の養護教諭 3 名、中学校の養護教諭 1 名の計 4 名を研究参加者とした。

5. データ収集方法

面接場所は、プライバシーの保護に配慮し、所属の学校の個室を借用して実施した。

研究参加者に対し半構成的面接調査を実施、インタビュー内容は、①インタビュー参加者自身の現在の役割と教育に携わってきた背景等の基本情報、②精神的問題を抱える生徒に関する学内外での研修や学びの機会、③精神的問題を抱える生徒との関わりの経験 (例: うまく対応できたこと、葛藤や試行錯誤)、④医療機関や他機関との関係性について、とした。

6. データ分析方法

インタビュー内容は IC レコーダーで録音、得られたデータは逐語録に起こし、意味単位にコード化した。コードの意味内容の類似しているものを帰納的に分類してサブカテゴリーとし、さらに

表1 研究参加者の属性

所属	性別	年代	養護教諭の経験年数	インタビュー時間
高等学校	女性	30代	10年以上	47分
高等学校	女性	40代	10年以上	60分
高等学校	女性	50代	30年以上	72分
中学校	女性	50代	30年以上	65分

抽象化し、カテゴリーとして示した。カテゴリー化に関するデータの分析は、研究者間で合意が得られるまで検討を重ねた。なお、本研究における研究参加者の所属が高等学校の養護教諭3名、中学校の養護教諭1名であった。エリクソンの発達段階⁴⁾では、両者とも青年期に該当し、自己同一性や社会的関係性が大きく影響する時期であり、精神疾患の好発年齢でもあることから、本研究では高等学校の養護教諭と中学校の養護教諭の計4名について、合わせて分析を行った。

7. 倫理的配慮

中学校および高等学校の管理者への研究協力、研究参加者である養護教諭への研究参加依頼の内容は、参加は自由意志であること、研究参加の撤回と中断の権利の保障、所属校および個人の匿名性の保持、目的以外のデータ使用はないこと、結果の公表予定について説明した。また、説明と同意の方法として、中学校および高等学校の管理者に対しては書面にて説明を行い、研究参加者に対しては口頭と書面にて説明し、文書で同意を得た。本研究は山形県立保健医療大学倫理審査委員会の承認(承認年月日: H27. 3. 5、承認番号: 1503-21)を得て行った。

結 果

研究参加者4名全員が女性で、年代は30~50代であった。養護教諭の経験年数は研究参加者全てが10年以上であった。また1人あたりのインタビュー時間は47~72分であった(表1)。

1. 研修会の参加状況

公費や私費による様々な形態があり、参加の可否は教諭個々に委ねられているものが多く、研修会の内容も、精神疾患や発達障害等、診断名が確

定されているものが多いとのことであった。

2. 養護教諭が精神的問題を抱える生徒との日々の関わりの中で捉えている現状と課題の結果は以下のとおり(カテゴリーを『、サブカテゴリーを〈〉で示す)(表2)。

1) 『捉えどころのない現代の生徒の特徴と人間関係』

養護教諭は、〈人間関係の複雑さ・希薄さが顕著である〉と実感していた。SNS等の背後にある、生徒間の人間関係のわかりづらさを感じており、特に、女子生徒においてその傾向は顕著に示されていると感じていた。また、〈内外的要因が関係する精神的な問題を抱える生徒の存在〉として、無気力や疲労感を訴え、抑うつ傾向の生徒の存在も挙げられた。さらに、保健室を頻繁に利用する生徒は、病気の有無に関わらず、気持ちが繊細な生徒も多いことが語られた。他に、保健室に来ない生徒のほうが気になる、指導の内容が伝わっているか不安であるなどの〈生徒の本質が把握しきれない〉という思いを抱いていた。

2) 『地域との共同と社会資源活用の必要性』

〈学校と地域との共同は大切である〉と思いつつも、実際には地域格差が存在しており、医療機関や社会的サービスに結びつけたいと考える事例においては、〈医療機関や社会資源の有無により対応が異なる〉と感じていた。

3) 『家庭環境の把握と保護者との関わり』

養護教諭は〈生育歴や家庭環境が影響する〉と認識していた。さらに〈保護者の理解と価値観が影響する〉と感じており、たとえば、保護者の理解が得られない場合は病院を受診することが難しいという現状が語られた。また、保護者とその子供(生徒)への長期的な関わりのある養護教諭は、

表 2 養護教諭が精神的問題を抱える生徒との日々の関わりの中で捉えている現状と課題

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
捉えどころのない現代の生徒の特徴と人間関係	人間関係の複雑さ・希薄さが顕著である	・LINEやSNSの背後にある人間関係がつかめない ・女子の方が人間関係が複雑である ・表向き“良い子”が多い印象がある
	内外的要因が関係する精神的な問題を抱える生徒の存在	・無気力、疲労感、抑うつなどの生徒が多い ・病気の有無にかかわらず、保健室を頻りに訪れる生徒は気持ち繊細な子が多い印象がある
	生徒の本質が把握しきれない	・指導の内容が生徒へ伝わっているのか不安である ・保健室へ来ない生徒のほうに気になる
地域との共同と社会資源活用の必要性	学校と地域の共同は大切である	・生徒の行動範囲には地域性が影響している ・高校自体の特徴は様々である
	医療機関や社会資源の有無により対応が異なる	・医療機関の有無や社会資源に地域格差があり場所によって対応が様々である
家庭環境の把握と保護者との関わり	生育歴や家庭環境が影響する	・生育歴が影響している ・家庭環境が影響している
	保護者の理解と価値観が影響する	・保護者の理解は重要である ・保護者の了承が得られない場合、病院受診が難しい ・親の価値観で子どもが動く
	世代間連鎖の可能性がある	・祖父母・親の境遇や思考が孫世代へ影響している ・親と同じような生き方を子どもが辿る
関係機関への期待と認識の不一致	関係機関との連携は必要不可欠である	・病院や関係機関との連絡が多い ・病院との連携は重要であると思う
	学校と病院では生徒への対応において認識の不一致がある	・病院受診までのハードルが高い ・学校は単位取得や学業のことを考えるが、病院は治療中心であり、考え方にズレがある ・学校という集団生活に関する助言は病院からは得られにくい
	事例検討が必要である	・事例の共有が必要である
	公的なサービスのハードルの高さ	・公的な支援に抵抗がある ・行政との関わり必要性を感じる
	スクールカウンセラーの活用は有効である	・スクールカウンセラーは身近に感じる ・カウンセラーから提示してもらうことは有用である
教師としての信念と葛藤	生徒との信頼関係が基本になる	・教師と生徒の信頼関係は大切である
	社会人としての基礎的なルールを示す	・社会に出る前に、社会人になるという自覚をしてほしい ・他者との関わり方や社会のルールを伝える
	個性性を尊重する	・事例によって1人1人対応が異なる
	継続した支援の難しさ	・関わりの中で葛藤を持ち続けていることの方が多い ・関わりにゴール設定はない
	どの程度介入すべきか判断が難しい	・生徒の病院受診に関するプライバシーの問題がある ・学校としてどこまで関わられるのか判断が難しい
職員間の協力体制を整える	職員間での協力体制を整える	・担任、部活の顧問、養護教諭等のキーパーソン存在は必要 ・チームとして体制づくりをする
	教諭への支援が必要である	・担任へのフォローが必要である

親と同じような生き方を子どもが辿るという経験から、精神的問題に関する〈世代間連鎖の可能性がある〉と語っていた。

4) 『関係機関への期待と認識の不一致』

病院や関係機関と連絡を取り合う事例は多く、〈関係機関との連携は必要不可欠である〉と認識していた。一方で、生徒個々に対する視点において、学校は単位取得や学業が中心であるが、病院は医療中心であり、方向性が一致しないという〈学校と病院では生徒への対応において認識の不一致がある〉という課題を感じていた。また、そのような状況を改善するため、様々な関係機関による〈事例検討が必要である〉と感じていた。

同様に、行政との関わり必要性を感じながらも、学校という組織を超え、公的な支援を得るには、教育という範疇を超えることになり、〈公的なサービスのハードルの高さ〉を感じていた。

一方、スクールカウンセラーの存在は身近であり、適切な助言を貰えることから〈スクールカウンセラーの活用は有効である〉と実感していた。

5) 『教師としての信念と葛藤』

生徒と関わる中で、人と人との基本的な関係性が築けるかどうか重要である。人として、教師として人間性が試される中で〈生徒との信頼関係が基本になる〉と実感していた。また、生徒との関わりの中で、これから社会へ巣立っていく生徒に対し、〈社会人としての基礎的なルールを示す〉ことに重点を置いていた。

養護教諭は、事例により一人ひとり対応が異なると実感し〈個別性を尊重する〉支援を行い、支援にゴールは無いという思いから〈継続した支援の難しさ〉を感じていた。さらに、プライバシーの問題から、〈どの程度介入すべきか判断が難しい〉と感じていた。

6) 『職員間の協力体制を整える』

〈職員間の協力体制を整える〉ことを重視していた。担任、部活の顧問、養護教諭等、多角的に生徒の様子を見ること、さらに支援のキーパーソンを置くことで、情報の集約化と共有を目指していた。そのために、養護教諭は教諭間でも声かけしやすい状況を作ることを意識しており、〈教諭

への支援が必要である〉と感じていた。

考 察

1. 生徒を取り巻く環境・問題の複雑化

近年、SNS（LINE、Facebook、Twitter等）の利用割合をみると、全年代では2012年の41.4%から2016年には71.2%にまで上昇している。また、年代別でも、10代のSNSの使用率は81.4%（2016年）となっている⁹⁾。SNSを使用することによる弊害は数多く報告されており^{9) 10)}、人間関係の複雑さを助長する一因子となっている。SNSは幅広い人間関係を作ることができる手軽なツールである一方、対人関係にも多面的な側面と弊害が生まれ、“生きにくさ”を感じることもあるであろう。また、保健室へ来訪しない生徒でも問題を抱えていること、無気力や疲労感、抑うつを訴える生徒が多くなったという語りから、生徒の実態が捉えどころないものになっていると推測される。

生徒の生育歴や家庭環境も大きな影響を与えていた。筆者らの先行研究においても同様の結果が示されている³⁾。教育基本法（平成18年改正）（家庭教育）第十条「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」とある。一方、現代社会においては、家庭の多様化が、本来の家庭の役割を成すことが難しい事例もある。地域における人間関係の希薄化もさらに拍車をかけ、生徒を取り巻く状況を複雑化させている。

他方、学校や生徒の居住地が都市部や郊外、町村等、規模や社会資源の有無も、生徒の支援に影響を及ぼしていた。ハード面の整備には限界があるが、既存の社会資源の中でも、人々の繋がりを基本とする中で、組織やシステムとして構築し運用していくことは可能である。2017年の新学習指導要領⁷⁾において、「家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」が取り上げられている。生徒個々への関わりは、もはや、その個人と家族だけの問題ではないといえる。

2. 養護教諭の役割と学校としての支援体制

養護教諭は個々の生徒が抱える背景、現代の社会的背景の中で葛藤を抱えつつ、担任や他の職員との協力体制をとり、生徒への支援を行っていた。先行研究^{8) 9) 10)}と同様、学校外の関係者とのやり取りも多く実施していた。反面、行政機関や医療機関へのハードルの高さも指摘された。教育における生徒への視点と、医療における視点には隔たりがある。生徒個々を全人的に捉え、各々の役割が発揮できるよう、関わっていく必要がある。そのためには、医療機関や保護者との橋渡しとして、コーディネーターの役割^{8) 9) 10)}が養護教諭に期待されている。また、本研究によって、外部の機関のみならず、同じ学校内の教諭に対する働きかけも、養護教諭の役割として重要であることが示唆された。多様な役割を果たしている養護教諭自身への支援体制も課題と考える。

他方、生徒のメンタルヘルス対策として、スクールカウンセラー等の活用は広がりつつあることから¹¹⁾、身近な資源を活用しながら、必要時には、外部支援の検討を行うことが重要である。

養護教諭や教諭は、学校教育の中で、本人の進級や卒業に関わること、医療機関を含む関係機関や保護者との関係性等、試行錯誤の中で支援をしている状況が明らかになった。

3. 早期介入を目指した学校と医療の連携

今回の養護教諭のインタビューは、保護者に対する説明やその後の介入の在り方の難しさが語られていた。また、学校として、どこまで介入できるのか、介入を行う必要があるかの判断に迷うという語りがあった。学校における精神的問題を抱える生徒は、生育歴、家庭環境、生活背景等、様々な要因が複合的に関連している可能性が高い。生徒一人ひとりを把握したうえで、個別的な関わりを行う重要性が再確認された。さらに、診断名が明確でない場合には、本人および保護者に対する説明の在り方も慎重に行う必要がある。学校としての判断のみで対外的な行動をすることは難しく、現状を打破することは容易ではないことが想定される。しかし、早期介入を行い、その後の支援へ繋げることは、生徒の将来を考慮しても重要である。

医療機関においても、養護教諭、学校教諭との

情報の共有の重要性が示唆された。特に、当該生徒に対し、どのような専門性をもって、どのような支援ができるかということを明確化することは、早期介入、支援の継続の理解へ向けた一歩である。保護者を含めた、関係機関の情報共有の場の重要性も示唆された。

研究の限界と今後の課題

本研究によって、養護教諭の視点で、精神的問題を抱える生徒に対する関わりの実態が明らかになった。一方、今回の対象者の中で中学校の養護教諭は1名のみであった。また、対象とした高等学校においては、進学就職状況等の集団特性は考慮されていないため、更なる研究の蓄積が必要となる。本研究において対象は限定的ではあるが、これまでの筆者らの継続的な調査の中で、実際の学校における支援の関わりを示す重要な資料となりうる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、インタビュー調査にご理解いただいた A 県内の中学校・高等学校の管理者の先生、インタビューにご協力くださった養護教諭の先生方に深く感謝申し上げます。

利益相反

本論文に関し、開示すべき COI 関係にある企業・組織および団体等はない。

文 献

- 1) 岡本 百合, 三宅 典恵. 学校における神経性食欲不振症—小・中・高校養護教諭アンケート調査—. 心身医学. 2015; 55(11): 1251-1258.
- 2) 高谷 新, 佐藤 大輔, 田名部 由香, 今野 浩之, 青木 実枝. 教諭から児の気になる様子を指摘された親の思いに関する考察. 山形保健医療研究. 2017; 20: 97-111
- 3) 今野 浩之, 高谷 新, 青木 実枝, 佐藤 大輔, 田名部 由香. 精神的問題を抱える児童および生徒に対する教諭の対応経験—小学校・中学

- 校・高等学校における調査－. 山形保健医療研究. 2017; 20: 61-72
- 4) バーバラ M. ニューマン/フィリップ R. ニューマン 著 福富 護 訳. 新版 生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性. 東京: 川島書店; 1988
- 5) 総務省 平成 29 年版 情報通信白書
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/n1100000.pdf>
(平成 29 年 11 月 29 日アクセス)
- 6) 池村 務. 若者の SNS 利用傾向と問題点に対する対策の提案. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要. 2014; 7: 281-288
- 7) 文部科学省 新しい学習指導要領の考え方
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
(平成 29 年 11 月 29 日アクセス)
- 8) 有賀 美恵子. 高等学校における不登校潜在群への支援に向けた研究課題の検討－高校生の不登校に関する文献レビューから－. 日本精神保健看護学会誌. 2012; 21 (2): 1-10.
- 9) 相樂 直子, 石隈 利紀. 養護教諭が行う援助チームにおけるコーディネーションの検討－保健室登校の事例を通して－. カウンセリング研究. 2011; 44 (4): 346-354.
- 10) 安林 奈緒美. 保健と教育が交錯する場における養護教諭の役割－学校管理職へのインタビュー調査を手掛かりにして－. 保健医療社会学論集. 2012; 23 (1): 74-84.
- 11) 芳田 眞佐美, 栗村 昭子. スクールカウンセラーによる教師のメンタルヘルス支援. 関西福祉科学大学紀要. 2010; 13: 91-108.

要 旨

本研究の目的は、精神疾患の好発年齢である中学校および高等学校の生徒に着目し、養護教諭が精神的問題を抱える生徒との日々の関わりの中で捉えている現状と課題を明らかにすることである。

A 県内の中学校および高等学校の養護教諭 4 名を対象とし半構成的面接調査を実施、インタビュー内容を逐語録に起こし、意味内容の類似しているものを帰納的に分類しカテゴリー化した。

カテゴリーは『捉えどころのない現代の生徒の特徴と人間関係』『地域との共同と社会資源活用の必要性』『家庭環境の把握と保護者との関わり』『関係機関への期待と認識の不一致』『教師としての信念と葛藤』『職員間の協力体制を整える』の 6 つが抽出された。

養護教諭は学校外の関係機関との調整の必要性を認識しながらも、実際の調整では支援の方向性の違いを感じていた。社会的背景や生徒の家庭環境から、捉えどころのない現代の生徒の状況に葛藤を抱きつつ、担任や他の職員との協力体制をとり、試行錯誤しながら生徒への支援を行っている現状が明らかになった。

キーワード：養護教諭 中学校 高等学校 精神的問題 支援